



STI

最後の傑作【後編】

Cover Photo
Muneki Samejima
© WORLD PHOTO PRESS 2022
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 第45回 **サイゴン物語** Saigon Memories
記者たちのベトナム戦争 [22]

008 **超大国アメリカが勝てなかった
5つの理由** 文/三野正洋

016 **ベトナムを遠く離れて——。**
私的ベトナム戦争映画/TVムービー Part 9 文/小倉徹

018 **LST船員の記録** 第7回
UNTOLD SEAMAN BLUES

030 **北ベトナム軍と解放戦線の
歩兵戦術** — 静寂を破る赤い旋風 —

ベトナム戦争 PACV Part 2
038 **空気で膨らんだモンスター
デルタで実戦デビュー!**

046 **ベトナム戦争の時代に生きた美女**

054 **Militaria Roundup!**
アメリカ空軍CWUジャケット

The Equipments of the U.S. Force
061 **[現用米軍装備カタログ]**
「海」装備特集 part 7 1990年代の強襲上陸装備
特集LBTモジュラー・ベスト 前編 解説/松原隆

074 **ウェスタンアームズ新製品リポート**
by SHOTGUN MARCY
●コルト コンバットエリート/G-10グリップVer.
●ハードボーラー/ターミネーター・モデル

083 **THE グリーンベレー** 文/DJちゅう
GREEN BERET BOOTLEG!!
MilsimFarEast 02



088 **陸上自衛隊第1空挺団と
米空軍374th AWの
空挺降下訓練**

092 **トイガンニュース**
●TANAKA WOEEKS M40ベトナム・ベーシック・モデル
/カートリッジ・タイプVer.2

ニッポンのちからこぶ ●写真と文/菊池雅之
094 **16式機動戦闘車**

099 **新製品情報 COMBAT mono**

ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
100 **サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!**

102 **サバゲ三等兵APS部**
子連れてない狼 — その小さき背中に — の巻

COMBAT FRONT LINE

060 ついに公開! 『トップガン マーヴェリック』

107 今月中田焦点!

108 新作映画情報 『ウォーハント 魔界戦線』『峠 最後のサムライ』『ニューオーダー』

104 第21回 Stringer Blues 写真・文/横田徹

106 レアミリタリーテクノロジー

109 読者PRESENT & CIC

111 奥付&次号予告



ミリタリースポッター

“Voie De Unconscient” - (The Path of the Unconscious) is written on the side of the mountain obstacle of the French Desert Commando Mountain obstacle in Djibouti, Africa.

The demanding French Desert Commando Course was created in 1976 by the five members of Monfort commando. The course is run by the members of the French Foreign Legion at the French Army Combat Training Center at Arta Beach. The course is a few times a year available to U. S. troops stationed in the region. Those completing the course earn a medal they may display on U.S. military dress uniforms.

Photo/US Army National Guard

「無意識の道」この言葉は、フランス特殊部隊がアフリカのジブチに山岳訓練用に拓いたコースの山肌に記されている。同コースは1976年に、フランスのモンフォール特殊部隊の5人のメンバーにより設置されたのが始まりである。現在は、アルタビーチのフランス陸軍コンバット訓練センターにいるフランス外人部隊により運営されている。年に数回、同地にいるアメリカ軍が利用できる期間がある。ここでの訓練修了認定バッジは、軍のドレスユニフォームへの着用が許されている。

超大国アメリカが勝てなかった

5つの理由

はじめに

1960年代の初めから約15年間、インドシナ半島を揺るがしたベトナム戦争。

これにより南ベトナム共和国は完全に消滅し、この国を支えようとしたアメリカは、軍事的、経済的、思想的、社会的に大きな打撃を受けた。

さらに隣国のラオス、カンボジアも被害を受け、またある部分兵站を受け持った我が国さえも少なからず影響を被らずにはいかなかったのである。

そのような状況下で、世界史の上からは、当時唯一の超大国であったアメリカが、なぜアジアの小国（北ベトナム）との戦争に敗れたか、という疑問が残る。“敗れた”という表現には多くの反対の声が上がるかもしれない。

しかしこの戦争に“勝てなかった”という事実には誰も反論できないところなのである。

アメリカは最大時
・周辺国への分を含めると陸軍および海兵隊の合わせて55万名の大兵力
・原子力潜水艦を除く、戦艦、空母など海軍戦力の半分
・B-52爆撃機など2000機、航空戦力の40%を派遣したが、それでも勝利を得ることはかなわなかった。

ここではこの原因、理由を5つの項目に分けて分析する。

その1 南ベトナム政府とその軍隊を巡る問題

この国は間違いなく自由陣営に属し、インドシナ戦争以後の建国当時からアメリカの庇護と支援を受

ケネディ大統領暗殺後、アメリカの第36代大統領になったリンдон・ジョンソン。泥沼化する一方のベトナム戦争が、ジョンソンの大統領再選への道を閉ざす原因につながった。

その1 南ベトナム政府とその軍隊を巡る問題

その2 戦場の特異性

その3 共産国からの支援の問題

その4 「片手を縛られてのボクシング」という問題

その5 情報戦を巡る問題

これらの点を整理しながらベトナム戦争とは

何だったのかを浮き彫りにする。

文/三野正洋

けていた。政府の首脳はかなり独裁的な傾向の強いグエン一族の系統であり、そのほとんどがキリスト教徒であった。

一方、国民の大多数は仏教徒であり、この点に微妙な食い違いが見られた。

つまり南ベトナム軍ARVNは、国民の軍隊というよりキリスト教政府の指揮下の軍事組織であったと言えるかも知れない。当然、このことに納得していない一部の兵士の反発もあり得た。

そのため南軍の空軍、海兵隊などは、共産主義的な反政府勢力の武力反攻が始まったさい、それなりに有

効な反撃を実施した。アメリカは航空機、戦闘車両、各種の火器などを豊富に供与し、さらに兵士への軍事訓練も継続的に行っている。それらはA-37攻撃機、M113装甲兵員輸送車、M-16小銃などを中心に、一年あたり1億ドルを超えている。

しかしながら80万名前後の歩兵部隊、30万名の地方民兵となると、戦意は必ずしも高いとは言えず、徐々に力を付けてきた民族解放戦線軍NLFに対しては常に押され気味であった。

もちろん1965年ごろから直接介入してきたアメリカ軍との共同作戦であれば、それなりの戦いぶりを見せ

ている。とくに67年いっぱいには多くの作戦を実施し戦果を挙げている。

しかし68年2月のテト攻勢を境にして、ARVNの士気は低下気味で、兵力的には少ない解放戦線軍に太刀打ちできなくなっていった。このように軽装備のゲリラ部隊にも翻弄される現状であれば、重装備の北ベトナム正規軍NVAには、とうていかなうはずはなかった。

アメリカ軍の最初の誤算は、十分な兵器を供与しながら南軍の戦闘意欲の低さにあったと言っても、過言ではない。とくに1970年から始まった米軍撤退後、南軍はほぼ同兵力の敵に敗北を続けたのであった。



UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守 (元LST乗組員)
文／吉野文敏 構成／編集部

【第7回】

まだ語られていない
LST船員の記録

1967年春、木村さんの乗る船は
最初のLST629からLST277に変わり、
4回目のベトナム航海に入った。
ダナン、クイニョンで何度目かの上陸をした後、
再び訪れた前線・ドックフォーで
初めて「ベトナムの戦争」を体感することになった。

ダナンの青空市場の一角。人々が被っているのは「ノンラー」と呼ばれる木の葉を編んだ傘帽子。後方には青い市内バスが走っている。

北ベトナム軍と解放戦線の 歩兵戦術

— 静寂を破る赤い旋風 —

文／鈴木健太郎 写真／WPPアーカイブ、D White コレクション、US ARMY、USMC、USAF

圧倒的な物量と火力を持つアメリカ軍に対する戦いにおいて北ベトナム軍と解放戦線は自らの身の丈に合った基本方針を持って戦いに臨み、その歩兵戦術は十分に吟味されていた。ここでは彼らの歩兵戦術について基本的なメソッドとプロセスを紹介する。



攻撃準備を整え、無反動砲、迫撃砲、機関銃とともに整列した北ベトナム軍あるいは解放戦線主力部隊。彼らの多くは自らが戦死したとしてもその運命を受け入れる覚悟が出来ており、場合によっては自爆も厭わない彼らの攻撃はアメリカ軍を震撼させた。



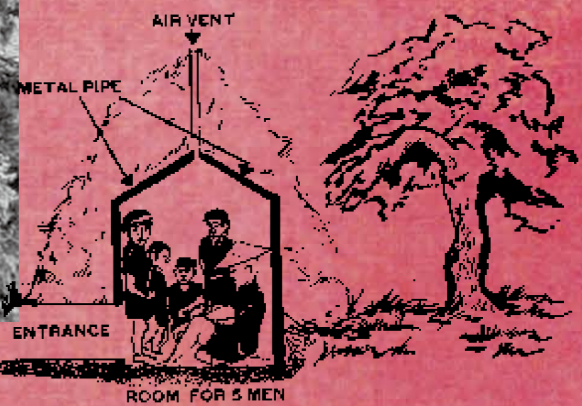
腰まで水に浸かりながら川を渡る解放戦線主力部隊。北ベトナム軍と解放戦線ではアメリカ軍との戦力差を埋めるために劣悪な地形を利用する、頻繁に夜襲をかけるなどの工夫を日常的に行っていた。



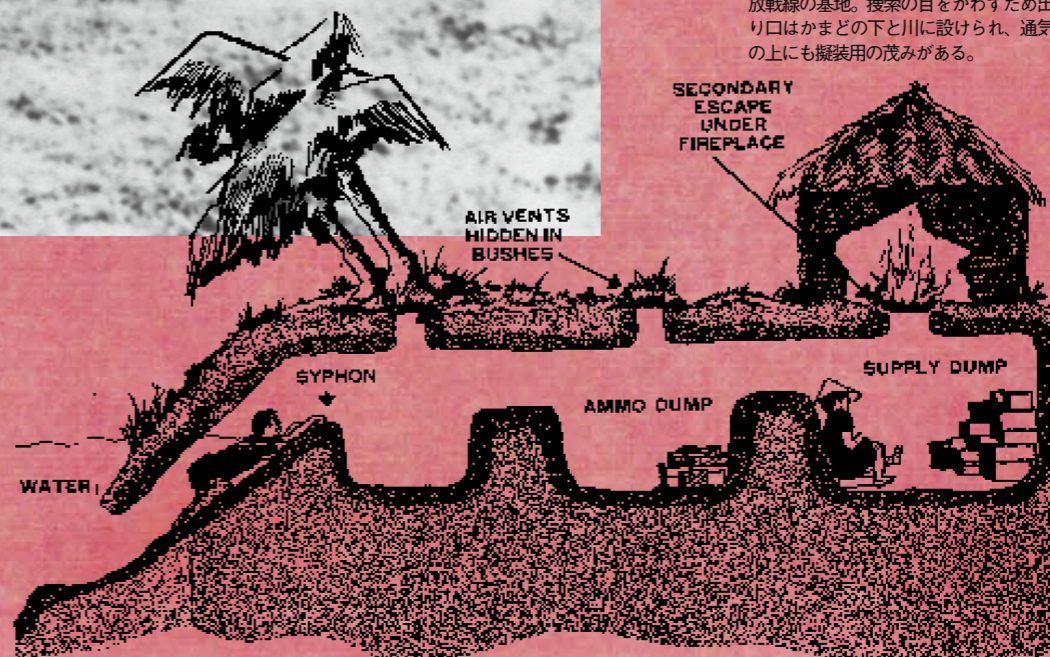
南ベトナムの村落を捉えた航空写真。住居の周りは視界を遮るかの様に木々が生い茂っており、北ベトナム軍や解放戦線の部隊が逃げ込んだ場合は捜索や追跡が非常に困難になった。



解放戦線の支配下にあった山岳民族の集落。少し見づらいが高床式住居の脇にはジグザグに掘られた塹壕がある。



(右) 干し草の山に擬装した解放戦線の隠し小屋。5人を収容でき、通気孔まで備えた本格的な作りである。(下) 地下に作られた解放戦線の基地。捜索の目をかわすため出入り口はかまどの下と川に設けられ、通気孔の上にも擬装用の茂みがある。



アメリカ海兵隊が解放戦線の支配下にあった村の入り口を検分しているところ。反政府勢力であることが目で分かる写真の様な例はアメリカ軍が本格介入した後はほとんど見られなくなった。

基本戦術と戦略的スタンス

歩兵部隊に関する北ベトナム軍と解放戦線の基本戦術は「①敵が追ってくれば逃げ、②敵が防御を固めているときは嫌がらせをし、③敵が疲れたら攻撃をかけ、④敵が撤退したら追撃する」という毛沢東の遊撃戦理論を踏襲しており、①では近隣の民家やトンネ

ル網が用いられ、②では迫撃砲や無反動砲による散発的な射撃やライフルでの狙撃を行なうと同時に各種ブービートラップを設置し、③と④では自動火器を使用した至近距離での強襲が行なわれる。北ベトナム軍と解放戦線はアメリカ軍が撤退する以前の戦いにおいては敵部隊や拠点の殲滅に重点を置いて行動し、支配地域の拡大

にはさほど関心を示さなかった。また彼らは戦術面では遊撃戦を主体とし、たとえ準備が整っていても勝てるという確信が持てない場合は交戦を避けるというきわめて慎重な基本方針を持つと同時に、戦略面では戦力や兵站能力の不足を補うには人的資源の消耗もやむを得ないと考えており、実際の戦闘では甚大な損害を被ること

も少なくなかった。自制心が求められる戦いが何年も続く中でも北ベトナム軍と解放戦線の兵士は非常に献身的であり、北ベトナム軍は装備と練度、解放戦線主力部隊は作戦地域に関する豊富な知識、パートタイマーを中心とした解放戦線地方部隊は地域の住民への溶け込みやすさというそれぞれの特徴を生かした戦い方を見せた。

US NAVY PATROL AIR CUSHION VEHICLE

ベトナム戦争 PACV Part 2 空気で膨らんだ モンスター デルタで実戦デビュー!

ベトナムと国境を接するカンボジア内の「オウムのくちばし」は、北ベトナム軍にとって補給物資の貯蔵庫であり、安全に守られた聖地だった。メコンデルタとそこを流れる水路を知り尽くしたベトコンは、いつでも自由に物資の再補給を受けられた。そこにゴムのスカートを膨らませて、デルタを高速移動するACVが現われた。水上だけでなく葦の原でも立木の間でも難なく行動できたエアクッション艇が繰り広げた実戦ぶりを振り返る。

構成 / コンバットマガジン編集部
訳 / 河村喜代子
写真 / 米陸軍 Photos/US Army

エアクッション艇、ACV (Air Cushion Vehicle) を運用する第39騎兵部隊が、ベトナム入りしたのは、テト攻勢が起きた直後だった。3艇すべてのACVが参加して行った軍事行動は、1968年6月7日に5時間にわたり実施した索敵一掃作戦が最初だった。この時は、30名の部隊の侵入および撤退を担当すると同時に、偵察活動と船舶捜索を行った。続く28か月の間に、ACVは実に多様なタイプの作戦に参加した。その作戦とは、索敵破壊作戦、武力偵察、索敵殲滅作戦、ルート確保、待ち伏せ攻撃、戦闘サポートである。

メコンデルタにおけるベトコンと

北ベトナム軍の存在は、強固だった。遠隔地である上に、デルタ内を通常の部隊が移動するのは困難だったからだ。テト攻勢以後は、敵に大がかりな作戦を実施する力は残っていなかった。それでもしきりに、大隊サイズの戦力をサイゴンに送りこもうとしては、失敗を繰り返していた。彼らが選んだ戦術は、基本的に、戦力をできる限り経済的に使うというものだった。動かすのは小規模レベルの部隊にとどめる一方で、政治運動に人員を注入する作戦を行った。北が政治的に目指していたのは、地元民を寝返らせて、ベトコン支持に回るように仕向けるのと同時に、サイ

ゴン政府に不信を抱かせるのを目的としていた。敵の補給物資は、カンボジアの「オウムのくちばし」地区から送りこまれていた。メコンデルタからだ、カンボジア国境までは、車でほんの数時間の距離である。この安全に守られた倉庫は、少なくとも連合国軍が1970年に急襲するまで聖地も同然で、安全に守られていた。そのエリア一帯に網の目のように張り巡らされている水路を使って、敵はいつでも必要な時に再補給を受けられた。

米陸軍第9歩兵師団の第3旅団が、第39騎兵部隊の上位部隊にあたる。元来は、師団に属すアクティブな旅

ベトナム戦争の時代に生きた美女

写真／木村 守 (元LST乗組員)

構成・文／編集部

アオザイというと、何を思い浮かべるだろう。見目麗しい女性がパッと頭に浮かぶという人がほとんどではないだろうか。ベトナムという国と、アオザイの歴史を辿ると、そう思い浮かべるのも安直とは言い切れない。ベトナム戦争の時代、アオザイを纏う女性たちがベトナム各地にいた。今現在よりも多くの女性たちが、ベトナムではアオザイを纏っていた。そんな時代の女性たちの実に貴重な写真をここに集めた。



ここに集められた女性たちの写真は、本誌連載中「まだ語られていないLST船員の記録」の木村守さんが、ベトナム各地(サイゴン、ダナン、フンタウ、クイニョン、チュライ、トゥーアン、ニャチャン、ファンランなど)で1965～1970年にかけて撮影したもの。木村さんが初めてアオザイを纏った女性を見たのは、1965年のサイゴンでのこと。「エキゾチックなんていう言葉じゃ物足りないですよ!」今もその鮮烈な印象が脳裏から離れないという。

Memories of Áo dài

Militaria Roundup!

アメリカ空軍 CWUジャケット

今年で創設75周年を迎えるアメリカ空軍。現在アメリカ空軍は7000機以上の航空機を運用し、世界各地に基地を持つが、そのユニフォームが紹介されることは少ない。今回はアメリカ空軍ユニフォームの中から飛行服の区分と、“CWU”の型式が付けられたジャケットの複製品を紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com/>

アメリカ空軍の誕生

ミリタリーファンはご存じのようにアメリカの空軍はもともと陸軍の一部で、第2次大戦後の1947年に独立した軍となっている。空軍の前身である陸軍航空隊司令官ヘンリー・アーノルド大將は大戦中の43年から空軍独立に関する研究をはじめ、戦争の抑止力たる戦略空軍と、地上部隊の支援を任務とする戦術空軍を基幹とし、これに地域防空部隊が加わるものとした。戦後の軍事費削減でその規模は縮小されたが、46年3月21日に戦略航空軍団(SAC)、戦術航空軍団(TAC)、防空軍団(ADC)の3個軍団によるメジャー・コマンド(MAJOCOM/主要軍団)方式を採用。これら軍団がアメリカ空軍の基礎となった。

この時点で、航空隊を陸軍と切り離して独立させる方針が決定されており、政府は1947年7月26日に国防法を制定。そして9月18日に陸軍航空隊は「空軍」として独立。その後の2年間で機材と人員、そして記録の一切を陸軍の管轄から移すことが決定される。空軍の役割は外敵に対する攻撃とアメリカ本土の防空とされたが、「外敵」とは共産勢力であり、ソ連を仮想的国として兵力の整備が行なわれていく。

独立後のアメリカ空軍は朝鮮戦争(1950~53年)とベトナム戦争(1962~75年)で実戦を経験したほか、東西冷戦時代には兵力の3分の1を24時間態勢で待機状態に置き、核爆弾を搭載した戦略爆撃機を常時滞空させておく態勢を取っている。こうしてアメリカ空軍は冷戦の終結まで、核戦争に対する有効な抑止力として機能することとなった。

空軍の近代化と冷戦の終結

1981年にロナルド・レーガンが大統領に就任し、共産主義とテロリストに対する対決姿勢を打ち出す。それを受けて空軍はB-1BランサーとB-2スピリット爆撃機、F-15イーグルとF-16ファイトニング・ファルコン、F-117戦闘機、A-10サンダーボルトII攻撃機等の新鋭機を導入し、核兵器の近代化に着手する。そして空軍はグレナダ侵攻(1983年)、リビア空爆(86年)、パナマ侵攻(88年)に参加したが、その実力を発揮したのは91年の湾岸戦争だった。地上軍の攻撃に先立ち、アメリカ空軍は多国籍空軍とともにイラク軍の軍事施設を爆撃して勝利に貢献している。

1989年に米ソ首脳が冷戦終結を宣言。その翌年の東西ドイツ統一と91年のソ連崩壊により、第2次大戦終結から続いた「冷たい戦争」は終結した。世界情勢の変化によってアメリカの国防予算は削減され、軍は地域紛争への即応能力を重視した改編に着手。空軍は規模縮小による能力低下を避けることに主眼を置き、組織の簡素化を重視する。

空軍の改編は1991年から93年にかけて実施されたが、その中で最大のものはメジャー・コマンド(Major Command/MAJOCOM)の削減で、92年に戦略航空軍団(SAC)、戦術航空軍団(TAC)、輸送軍団(MAC)の3個軍団を統合して航空戦闘軍団(ACC)と航空機動軍団(AMC)に再編成。93年には空軍大学(AU)と訓練軍団(ATC)が統合されて空軍教育訓練軍団(AETC)となり、メジャー・コマンドは8個軍団編制に簡素化された。その後97年に空軍予備役軍団(AFRC)、2009年に地球規模攻撃軍団(AFGSC)が新設され、現在のメジャー・コマンドは10個軍団編制となっている(軍団の内訳は別表を参照)。

空軍メジャー・コマンド(MAJOCOM)章

アメリカ空軍のメジャー・コマンドは冷戦時代の1977年の時点で13個が存在したが、冷戦終結後の再編成で10個となった。メジャー・コマンドは機能や作戦方面によって分類されており、太平洋航空軍(PACAF)や在欧米空軍(USAFE)には「軍団(Command)」の名が付いていないが、メジャー・コマンドに数えられる。ここで示したのはその一部で戦略航空軍団(SAC)と戦術航空軍団(TAC)は1946年3月の創設で、92年に統合再編成された空軍戦闘軍団と(ACC)になった。輸送軍団(MAC)は1947年創設の軍航空輸送部隊(MATS)を66年に改編した組織で、92年に空軍機動軍団に改編されている。

ここで紹介したACC章は中田商店扱の複製品で、フルカラー版(P268)が980円。台座付きのデザート・サブデュード版(P265)が1200円。ともにベルクロ付きだ。(撮影協力:中田商店)

054



アメリカ空軍のロゴ・マーク

現在アメリカ空軍が使用しているロゴ・マークは空軍誕生50周年に採用され、1941年に採用された陸軍航空隊の部隊章(左)をベースに新たにデザインされたもの。空軍ユニフォームではPTG(Physical Training Gear)と呼ばれる運動着や、インフォーマル・ユニフォームのシャツにプリントされている。(U.S.A.F.)

アメリカ空軍 名称の変遷

陸軍通信隊航空部門	Signal Corps Aeronautical Division	1907~18年
アメリカ遠征軍航空サービス	Air Service-American Expeditionary Force	1917~18年
陸軍航空サービス	Air Service	1918~26年
陸軍航空軍団	Army Air Corps	1926~41年
陸軍航空隊	Army Air Forces	1941~47年
空軍	U.S. Air Force	1947年~現在

アメリカ空軍メジャー・コマンド内訳(現行)

空軍戦闘軍団(Air Combat Command/ACC)
空軍機動軍団(Air Mobility Command/AMC)
空軍宇宙軍団(Air Force Space Command/AFSPC)
太平洋航空軍(Pacific Air Force/PACAF)
在欧米空軍(US Air Force in Europe/USAFE)
空軍教育訓練軍団(Air Education and Training Command/AETC)
空軍資材軍団(Air Force Materiel Command/AFMCMC)
空軍特殊戦軍団(Air Force Special Operations Command/AFSOC)
空軍予備役軍団(Air Force Reserve Command/AFRC)
地球規模攻撃軍団(Air Force Global Strike Command/AFGSC)



アメリカ空軍の飛行服区分

現在アメリカ空軍の飛行服は服装規定規定AFI36-2039の2021年版で①フライング・デューティー・ユニフォーム(Flying Duty Uniform/飛行任務服。FDUと略称)、②アウトター・ガゼメント(Outer Garment/上着)に大別されている。

①はカバーオール式のフライング・スーツで、色はセージ・グリーンとデザート・タン(タン380)の2種類が存在。前者をFDU、後者をDFDU(頭の“D”はDesert(砂漠)の略)として区別されている。FDUはその名のとおり飛行任務時に着用するが、服装規定には「象徴性(Distinctive)と機能性(Functional)の両面を持つアイテム」とあり、空軍を象徴するユニフォームとしても着用。その着用対象には航空機搭乗員のほか、パラシューティスト、空軍宇宙軍団のミサイル部隊クルーが含まれる。

②はその名が示すように①のFDUの上に着用するアイテムで、(A)フライトジャケットと(B)エアクルーMCPSの2つに区分。(A)はさらに(a)ライトジャケット(CWU-36/PおよびCWU-45/P)と(b)レザー・フライトジャケット(A-2)の2種類に分類されている。そして(B)のエアクルーMCPSだが、これは“Multi Climate Protection System”と呼ばれる多気候保護システムに基づくもので、素材にノーマックスとゴアテックスを使用したジャケットとトラウザーズから構成される。

ちなみにアメリカ軍が現在使用している各種飛行服には“CWU-O/P”の型式が付けられているが、これは1950年代後半から導入されたもので、“CWU”は“Clothing Warms Unit”の略。そして“P”は“Personal Use”の略で、「個人用温暖衣料ユニット」くらいの意味。今回の特集では各種CWU装備の中から1960~70年代にグラウンド・クルーが着用したCWU-7/Pおよび、現在使用中のMCPSユニフォームのCWU-106/Pの複製品を紹介しよう。



現在の航空機はコックピットが与圧されており、パイロットやエア・クルーが飛行中に着用するのはフライング・スーツのみで、フライトジャケットを着るのは稀だ。写真はF-22ラプター戦闘機のパイロットで、左側の兵士が航空装備の下にフライトジャケットを着用(袖口のニットに注目)している。(Photo: U.S.A.F.)



フライング・デューティ・ユニフォーム FLYING DUTY UNIFORM(FDU)

現在飛行服の主流を示すのがフライング・デューティー・ユニフォーム(FDU)と呼ばれるフライング・スーツで、使用する温度域や作戦地域に応じたバリエーションが多数存在する。写真のCWU-28/PカバーオールはCWU-27/Pのカラー・バリエーション(CWU-27/Pはセージ・グリーンとデザート・タンの2タイプ)で、デザインは同一。素材に難燃性のポリアミド繊維を使用している。CWU-27/Pは1970年に採用され今も現役のFDUで、飛行士以外にも特殊部隊も使用。(撮影協力:中田商店)

レザー・フライトジャケット LEATHER A-2 FLYING JACKET

A-2ジャケットは陸軍航空軍団が1931年に採用したフライトジャケットで、型式の“A”は「夏期用」を示す。第2次大戦中の43年に生産を終了したが、空軍の強い希望で復活。アメリカ空軍誕生40周年の87年に採用され、翌年から支給が開始されている。ちなみに写真のA-2はクーバー・スポーツウェア社(空軍との最初の契約メーカー)の1988年製。空軍版A-2の着用対象は空軍長官および空軍次官、将校、下士官飛行士、エア・クルーで、着用は地上に限定。制服(サービス・ユニフォーム)、各種FDU、病院用白衣(ホスピタル・ホワイト)と合わせて着用することが認められているが、私服(シビリアン・クロージング)での着用は空軍長官と次官を除いて不可とされている。両胸にはベルクロが取り付けられており、右胸に革または合成皮革製のネーム・タブ(黒か茶色)、右胸にメジャー・コマンドのバッジを着用する。(撮影協力:中田商店)

フライトジャケット FLIGHT JACKET(CWU-36/P)

CWU-36/Pは空軍がA-2Bジャケットの後継として開発したライト・ゾーン(温度域10~30℃)用フライトジャケットで、素材にはFDUと同じ難燃性のポリアミド繊維を使用。1978年から支給が開始され、現在アメリカ全軍(陸、海、空、海兵隊)の共通ジャケットとして着用されている。デザインは海軍が73年に開発したコールド・ウエザー用のCWU-45/Pに準じているが、ライトゾーン用なのでジャケットに内綿は入らない。なおCWU-36/PとCWU-45/Pに関しては次回で紹介の予定。写真はヒューストン製の複製品で、胸にベルクロの付かないタイプも販売中。(撮影協力:中田商店/A-197-WV ヒューストン CWU-36P ベルクロ付/価格2万4800円)

MCPSユニフォーム(CWU-106/P)

MCPSユニフォームはさまざまな気候に対応した保護システムに基づいて開発されたもので、空軍の服装規定には“エアクルーMCPS”と記載されている。素材にノーマックスとゴアテックスを使用し、ジャケットとパンツ(服装規定に“Pants”と記載されている)、そしてフリース製ライナーから構成。FDUの上に着用するアイテムで、ライナーを単体で着用するのは禁止されているが、気温の低い場合はFDUの下に着用することが認められている。(撮影協力:中田商店)



055



第189回 [現用米軍装備カタログ]
「海」装備特集 part 7

1990年代の強襲上陸装備特集ロンドン・ブリッジ・トレーディング(以下、LBT)モジュラー・ベスト 前編

●解説/松原 隆 ●撮影/山崎 学 ●協力ショップ/LAZY CAT、トイソルジャー、TRiS ●協力/木島秀邦

LBTについて EAGLEインダストリーと並んで、1990年代の現用装備を代表する「ロンドン・ブリッジ・トレーディング・カンパニー株式会社(以下、略してLBT)」は、バージニア州バージニアビーチに本社を置く。創業者で会長のダグ・マクドゥーガル博士は、1985年にバージニア州ノーフォークのイースタン・バージニア医科大学の教授を退官した後、LBTを立ち上げた。マクドゥーガル博士の趣味はミリタリー・アンティークの収集で、展示会に参加しては“趣味”の軍事アンティークを取引する“トレーディング”が会社名になったものである。現在はバージニア州バージニアビーチとテキサス州エルパソに製造施設を持つ会社になり、平均10年近くの在職期間を持つ18ヵ国から250人以上の従業員を雇用している。現在はマクドゥーガル博士の義理の息子であるデビッド・ボハノンが社長兼最高経営責任者となり、同業社が巨大産業に身売りする中、家族経営を守り続けている。

**THE EQUIPMENTS
OF THE U.S. FORCE**



STI

最後の傑作 【後編】

コンペティティブ・シューター にとっての.40SW

今月号ではSTI/TTI コンバットマスターの実射に関して話をしている。前号(2022年6月号)でも触れたが、このモデルは一般モデルとは異なる.40SW仕様の特別モデルだ。一般市場では.40SW仕様の銃の存在価値は薄れつつあるが、USPSA/IPSCの世界ではまだ需要が残っている。これは、弾薬の威力に規定があり、PF(パワーファクター)165を超えるには、9X19mmだと威力不足であり、またルール上も.40口径以上の弾薬を使うことが定められている。当初、この部門で使用される銃の口径の主流は.45ACPだったわけだが、装弾数が多く、弾代も安い.40SWの方が優れていることから急速にそのシェアを伸ばした。リローディングをする人にとっては、プライマーをほかの部門で使用される9X19mmや38スーパーコンプ等と同じスモール・ピストル・プライマーで共用できる点も見逃せない。(.45ACPは、ひと回りサイズの大きなラージ・ピストル・プライマー)さまざまな部門があるプラクティカルシューティングでは、リミテッド/スタンダード部門がアイアン・サイトを使用する部門の中心と言える。使用される銃は、主に2011系が主流だ。このコンバットマスターは、正にその部門での使用を前提とされた銃となる。



特別仕様の.40SWのSTI/TTI
コンバットマスターを実射テ
スト! その実力は?



競技で使うことを意識したモデルということもあり、リア・サイトは上下左右に調整可能なボマー・タイプ。STIの刻印が入っており、現在では絶版となっている。

通常分解した状態。STI製の中でもクオリティの高いパーツが選ばれている。

.40SWの撃ち味

数年前にも撃ったこのコンバットマスターの実射テストを改めて行なう。今回は、25ヤードのアクセラシーもチェックし、数種類の弾薬もテストすることにした。9X19mmの2011シリーズは、非常に撃ちやすい。過去にステイールチャレンジのリミテッド部門にエントリーした際は、弾薬規定がないことから9X19mmのSV Infinityやリムキャット・カスタムの2011を借りて使用したが非常に撃ち易かった。9X19mmの一般仕様のSTI/TTIコンバットマスターもTTIのレンジを訪れた

際に撃たせてもらったのだが、これらに通じる素晴らしい撃ち味だ。同じ9mmでも2011系の撃ち味はポリマー・フレームの銃と比べるとマズル・フリップが少なく、高級感を感じる撃ち味だ。それに対して.40SWはどうか? .40SW弾をマガジンに装填しながら、以前この.40SW仕様を撃った時のことを振り返る。あれは、ニルスと一緒に練習に行った時で、テストというよりは体験的に撃った程度だ。さて、立てたターゲットに狙いをつけてトリガーを引く。予想以上のリコイルに少し驚く。9mmと比べると、ドシッとした印象でマズルが跳ね上がる。使

フロント・サイトには素早いサイティングを可能にする視認性の高い赤いファイバーが入っている。



COLT COMBAT ELITE G10 GRIP Ver.



コルト・コンバット・エリート G10グリップVer.
 ●全長:約220mm ●銃身長:約114mm
 ●重量:約884g ●装弾数:21+1発
 ●スペシャル価格:4万5,100円 ●絶賛発売中!!



ポリッシュされたスライドにコンバット・エリート・シリーズの最新盤コルト刻印が再現されている。やや立ち上がり気味のランパン・コルトもコンバット・エリート・シリーズの特徴だ。



150周年を迎えたコルトは、それを記念していくつかのM1911系ニュー・バリエーションをリリース。そのひとつが、シリーズ80ベースのセミ・カスタム「コンバット・エリート」だった。コンセプトは、コンバット系レースに参加するシューターに向けた、高機能と集弾精度に優れたM1911。リング・ハンマー、ダックテール・グリップ・セフティ、コルト・メダリオンを埋め込んだラップ・アラウンド・タイプのバック・マイヤー・グリップなど。一番の特徴はステンレス製シルバー・フレームに、ガンブルー・フィニッシュのスチール製スライドを組み合わせた2トーン・カラーで、日本ではフレーム・シルバーと呼ばれた外観。スタンダード・デザインの外、ゴールドカップ・ナショナル



マッチなどが、コンバット・エリート・シリーズとして製作された。その後、サブ・コンパクトの発展やタクティカル系モデルの登場で、影が薄くなったコンバット・エリートは、2018年にトップシリーズを目指して再構築され、オール・ステンレス製の2トーン・モデルとなり、現在に至っている。2019年には、米ガンダイジェストで「ファイターズ・ハートを備えたグッド・ルッキングなBBQ（バーベキュー）ガン」と評価された。「BBQガン」は開拓期のアメリカで、カジュアルな集会ながら近隣や周辺地域の大切な交流の場であり、政治的な役割も果たしていたBBQには、ガン

もホルスターも日常的に使っているものではなく、ワンクランク上のもを携帯するべきだ、という習慣から使われるようになった言葉だという。もちろん外観に限ったことではなく、総合的な性能もワン・ランク上であることが大前提になっているそうだ。コルトが目指した高精度と鮮烈な外観を称賛した言葉、それが「BBQガン」というわけだ。サンドブラストとポリッシュで、CBHWの持ち味を十分に引き出したWAの“コルト・コンバット・エリート”。金属感溢れる外観と、コルト純正を正確に再現したG10グリップを備えた新世代のガバメントの登場だ!!

ダーク・グレーの曲面部分とポリッシュされた側面のコントラストが印象的なコンバット・エリート。G10グリップには、マガジン・リリースボタンへのスピーディなアクセスをサポートするスカラー加工が施されている。

M1911マグナ系のベーシックなパーツ構成を受け継ぐコンバット・エリート。ブローバックの衝撃を受けるバッファ・システム、トップ・ヘビーなバランスを生み出すスチール製のリコイル・プラグなど、迫力あるアクションとスムーズな作動を確保する工夫が凝らされている。



としなかったのだろう。そしてディフェンダーから約1年半、この5月下旬にファン待望のコンバット・エリート・シリーズ第2弾、ガバメント・サイズの“コルト・コンバット・エリート”が登場することになった。CBHWを本体素材に、サンドブラストと粗めのヘアラインを残した平面部分のポリッシュなど、基本仕様はディフェンダーと同じ。曲面部分の濃いマットグレーと、ヘアライン・フィニッシュされたフラット・サイドのシルバーが、金属特有の冷たさを感じさせ、重厚さと立体感を際立たせる。ポリッシュとガンブルーで

入念に仕上げられた外装パーツもすべて搭載されている。ブランク上のスライドに、リア・フロント・サイト用の溝、幅の広いコッキング・セレクション、ロー・プロフィール&フェアバック・スタイルのエジェクション・ポートなどを、高い精度で機械加工。フレームも同様に、トリガー・ガードからフロント・ストラップへと続く曲面にハイグリップ・カットを追加。イン

デックス付きのハイライド・ビーバーテールを組み合わせることで、より安定したグリップリングを約束している。フロント・ストラップには、40piのノン・スリップ・チェッカーを後加工。ディフェンダー同様、最下部7、8mm幅をラウンドのまま残して、衣服などへの干渉を防止している。コンバット・エリートの歴史は1986年にスタートした。この年創設

トリガー・ガード後部からフロント・ストラップに流れる曲面に、カスタム・テイスト溢れるハイ・グリップ加工を追加。

フロント・ストラップに40piのノン・スリップ・チェッカー。

クイックドロウの際、衣服などに干渉するといわれるフロント・ストラップ下部分をあえて曲面のまま残し、わずかに低くなるように加工している。

スライド後端に高い精度でセットされたノバック・タイプのリア・サイト。ワイド・スパーのアンビセフティ、ハイライド・タイプのインデックス付きビーバーテールなど機能性の高いパーツが採用されている。



MFE02

MFEではミルシムを開催する上で、細部に至るまで設定が作りこまれている。たとえば背景となる架空の世界情勢、架空の国家ウトロムスク連邦、レヴォニア共和国の存在、踏まえてミルシムを行なううえでのブリーフィング資料など、まさに演習さながらだ。今回のざっくりとしたストーリーは以下の通り。

STORY PLOT

ウトロムスク連邦に隣接するレヴォニア共和国。そのレヴォニア共和国ダリン地区は領土をめぐる紛争が頻発。そんな中、3月15日、ウトロムスク地上部隊がダリン近郊に集結。そして、大規模な攻撃が行われた。同月21日。ウトロムスクの侵攻は現在も続いており、戦火はレヴォニア全土に拡大しはじめた。ウトロムスク部隊が民間人を狙った攻撃を行なうなど、戦争が拡大するにつれ、民間人の死傷者や難民の増加が大きな問題となっている。これに対して、NATO対応部隊に展開準備を命じ、ISR (intelligence, surveillance and reconnaissance/情報・監視・偵察) の状態を強化。レヴォニアを米国が支援。レヴォニア国内へ秘密裏に戦力が投入されることとなった――。

※ミルシムのディテールをより深くするため、現実世界を参考に架空の世界情勢をベースとしたオリジナル設定となっている。

ウトロムスク連邦

RED TEAM / CJTF-211 & SOTF-212



※新たにデザインされたサブデュードカラー国旗ver



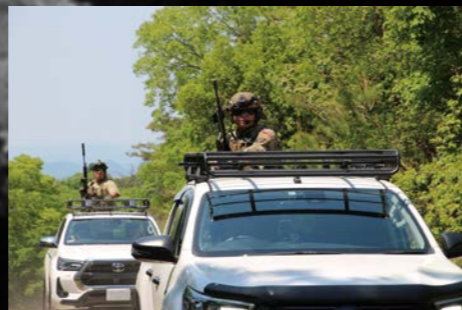
DAY.01 1100 / 状況開始

RED/BLUE両陣営の配置/障害/補給地点などの情報収集も作戦に含まれるため、事前の開会式は行なわれず分かれた状態でのスタートとなった。約22時間ぶっ通しの状況となるため野営のためのギアも装備する。



1200 / 陣地構築

REDは前線武装給油地点 (FARP) の構築、防衛ラインへ鉄条網・塹壕・銃座の設置など襲撃に備える。



1223 / 車両巡回

現地の協力者によりREDへ補給物資や回転翼機用の燃料など時折車両にて搬入された。BLUEはこの車両に関する情報・目的も集めなければならない。



1320 / 衛星映像

赤外線カメラ搭載のドローン投入。映像による情報も共有された。



1445 / 強襲・奪還

RED SOTF-212デルタフォース分隊はHVTを捕縛または無力化するためBLUE CPを強襲。一時CP1が奪取されるも、BLUE JTF-402 MARSOC分隊がそれを阻止。CP付近の奪還に成功する。



1510 / 捕虜

西側RED防衛ラインにて接触したBLUE1名がREDの捕虜となる。※ちなみに筆者が捕虜でした。



1800 / 夜間警戒

徐々に明かりを失っていく中、REDは夜間警戒シフトへ移行。交代での歩哨となる。



DAY.02 0300 / 偵察行動開始

日が昇る前、部隊は再集結し攻撃の体制を整える。2100~0300の間は射撃禁止となり参加者は野営にてしばしの休息を得た。



0330 / TAK

ATAK/iTAK統合サーバーにて運営は両陣営の位置をリアルタイムで把握する。

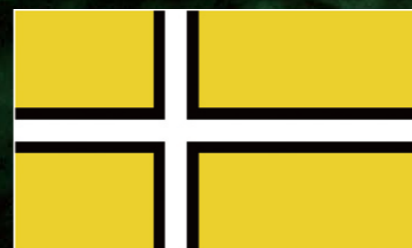


07XX / CAS

航空支援はフライトシュミレーターよりリアルタイムに行なわれる。距離、座標、経路、空中給油など細かく反映された。

レヴォニア共和国サイド

BLUE TEAM / JSOTF-401 & JTF-402



REVONIA



0533 / 北部防衛ライン

BLUEによるCAS着弾と同時に一斉攻勢へ。REDはCASにより1個分隊がほぼ壊滅する。



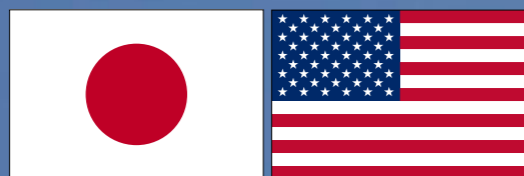
07XX / 負傷

軽傷は指定箇所を止血、重傷はPJによる処置を行なわなければならない。無力化してしまった場合はCPに戻ったのち転生となる。



0740 / 状況終了

長い戦いが幕を閉じる。緊張が解け、ようやく笑みがこぼれていた。



陸上自衛隊第1空挺団と 米空軍374th AWの 空挺降下訓練

取材 / 神野幸久 (「航空ファン」編集部)

4月19日から21日にかけて、千葉県の上自衛隊習志野駐屯地に所在する第1空挺団と東京都の米空軍横田基地に配備される374th AW (第374空輸航空団) が、空挺降下訓練を実施した。これは日米のパートナーシップや部隊間の作戦能力強化を目的とした訓練で、近年は日米共同訓練の一環など、大小さまざまな規模で年に数回実施されている。

今回のものは第1空挺団と374AWのみで完結する部隊間交流に近い比

較的小規模なもので、ほぼ一年に1回行なわれている訓練。第1空挺団の隊員は陸路横田基地に展開、現地で空挺降下装備の装着からC-130J-30スーパーハーキュリーズへの搭乗までの流れを演練、その後、千葉県の習志野演習場まで飛び、空挺降下訓練を行なった。なお、今回の訓練でC-130J-30を運用した374AW指揮下の36th AS (第36空輸飛行隊) は、習志野での降下訓練後もフライトを継続、総合的な航法飛行訓練を関東一円で実施した。



16式機動戦闘車

毎年爆誕し、日本全国に配備が進む16式機動戦闘車!

目的は「統合機動防衛力」の実現を目指すこと。

打撃力+機動力を合わせ持ち、即応機動連隊および偵察戦闘大隊の中核だ。

新生陸自に必要な不可欠な装備となったこの装備を改めて紹介する!

16式機動戦闘車の射撃の瞬間。主たる武装は105mmライフル砲だ。写真の車体は第3即応機動連隊へと改編される前の第3普通科連隊時代のもの。砲塔には3I(普通科の英語表記Infantryの頭文字)と書かれている点に注目。

陸自は創設以来最大規模の大改編を断行中である。目指しているのは「統合機動防衛力」の構築。さらに、領土、領海、領空に加え、今後は宇宙、サイバー、電磁波といった新たな領域まで守る必要が出てきた。そこで、今後は「多次元統合防衛力」の構築を目指していく。

陸自は、日本列島を5つに区切り、

北から北部/東北/東部/中部/西部方面隊を置き、防衛警備に当たってきた。今後は創設当時から続く基盤的に日本を守る姿勢はそのままに、方面隊隷下の師旅団を機動型および地域配備型へと分け、防衛力を高める姿勢を打ち出した。

各方面隊隷下の師旅団の数は陸自全体で15個。これを機動師団・機動

旅団、地域配備師団へと改編していく。

機動師旅団の役割は、有事の際に必要なとされるほかの方面隊区へと迅速に展開して戦うことになる。地域配備師団の役割は、その機動師旅団が抜けた穴を埋め、自分たちの方面隊区をしっかりと守ることだ。

そこで、機動師旅団には「即応機動連隊」、地域配備師団には「偵察戦

闘大隊」という新しい部隊が誕生した。これらの部隊の特徴は諸職種合同部隊となっている点だ。

有事の際は、師旅団隷下の普通科、機甲科、特科、施設科……といった各部隊をコンバインドさせ、戦闘団を作り、戦う。だが、同じ師旅団に所属しているとはいっても、他職種である上に、駐屯地も異なり、装備